

第二次世界大戦直後の新教育

「生活单元学習」－神戸大学発達科学部附属住吉小学校－の開発(1)

横 山 ひ ろ み

New Education Immediately After the Second World War

－Development of “Seikatsu Tange Gakushuu” at Sumiyoshi
Elementary School Attached to Kobe University－ (1)

Hiromi YOKOYAMA

要 旨

我が国では、第二次世界大戦直後に新しい理念の下で、教育が改革された。本論文では、その中でも特筆されるべき成果を上げた神戸大学発達科学部附属住吉小学校の「生活单元学習」を取り上げ、戦後の混乱の中から立ち上がり、子供を見つめながら編み出された新指導法の成立過程とともに、その学習の根本的立場を考察した。

今日の社会的環境の流動化に呼応して、教育においても大改革と銘打った変革が迫られているのは周知の通りである。

1998年11月には新学習指導要領案も発表され、2002年の実施に向けて改訂作業が進んでいる。その教育の中心として、「生きる力」の育成が挙げられ、その展開にあたって「総合的な学習の時間」も新設された。

今回の改定は、既成の教科課程の枠組みを越えて、全人的教育へと視点を移すものとして、明治期の学制公布、第2次世界大戦直後の教育改革に次ぐ変革と言えるかもしれない。その成否の鍵は、学力のスリム化とそれに代わる生き

る力との調和と、子どもの内から湧き出る学習意欲の育成にあらう。従来の与えられる教科・学習から脱すること、そして、子ども達が日々暮している日常の生活体験にしっかりと根ざし、その上で自ら生きる者としての実感を持って、あらゆるものに問いかけ、実体を追求し、それへの自らの対処を判断することが求められている。その対象が何であろうと、あらゆる未知のものに真っ直ぐに向き合い、そこから学び、充実した気持と共に自らの向上を実感し、更なる前進へと喜びを持って歩もうとする、そのいきいきとした心の在りようが、「生きる力」として、望まれているといえるのではないだろうか。

今回の改革の成功のためにも、私は過去の先人達が試み、実現した先駆的教育について学び、今後の新教育への示唆を得ることが必要ではないかと考えるのである。

本論文においては、「生活単元学習」として、第二次世界大戦後の民主化教育に大きな役割を果たした教育方法について考察する。兵庫県下の伝統的な教育実験校としては、兵庫師範男子部附属住吉小学校＝現神戸大学発達科学部附属住吉小学校（以下附属住吉小学校）と、兵庫師範女子部附属明石小学校＝現神戸大学発達科学部附属明石小学校（以下附属明石小学校）の教育研究が知られている。

「生活単元学習」は、附属住吉小学校において開発されたものである。その新しい視点は、兵庫県下のみならず、日本全国に知られ、当時の連合軍による民主化教育の推進と相まって、新しい教育理念の確立に向けて大きな影響を与えたものである。よって、附属住吉小学校での当時の新教育の実践をたどることにより、その教育理念は、今回の教育改革への理解の一助となると考えるのである。

以下、本論文では次のように論述する。

1. 附属住吉小学校の沿革——概略、いかなる使命を持ち、伝統的経過を歩んだ学校であるか。
2. 第二次世界大戦直後の GHQ（連合軍総司令部）の CIE（民間情報教育局）による日本民主化政策と日本政府の対処——占領下の附属住吉小学校の教

育を理解する背景を知る。

3. 附属住吉小学校の敗戦からの立ち上がり —— 焦土の中から、現実の子どもを見つめて、自発学習、社会科学習、生活単元学習を実施していく苦闘の経過を解明する。
4. 社会科の創設から、「生活単元学習」へ —— 特に新教科における社会科の受けとめ方、新しい人間形成、従来の教科学習への批判、総合学習、「生活単元学習」へ到達する過程、学習の根本的立場の確立を考察する。

第1章 附属住吉小学校の沿革

まず、附属住吉小学校の沿革をたどることにより、その教育研究の解明への端緒としたい。

附属住吉小学校は、現在、神戸大学発達科学部に属しているが、かつては兵庫県立の師範学校の附属であり、次の経過をたどって今日に至っている。

(明7) 神戸教育伝習所設立 (明10) 神戸師範学校と改称 (明11) 附属小学校開校 (明19) 兵庫県尋常師範学校と改称 (明31) 兵庫県師範学校と改称 (明33) 兵庫県第一師範学校と改称 (明34) 兵庫県御影師範学校と改称 (明36) 兵庫県姫路師範学校附属小学校設置 (大11) 兵庫県御影師範学校附属小学校にて『くすのわかば』創刊 (昭3) 附属小学校創立50周年記念式典挙行 (昭11) 御影師範学校、姫路師範学校が合併統一し、兵庫県師範学校と改称、よって兵庫県師範学校御影附属小学校と改称、校歌制定、公開研究会開催、創立60周年記念祝賀会開催 (昭13) 赤塚山に新校舎落成 (昭16) 兵庫県師範学校附属国民学校と改称 (昭18) 師範学校が専門学校に昇格、国立に移管、兵庫県師範学校男子部附属国民学校と改称 (昭20) 集団疎開の実施 (昭22) 近畿モデルスクールに指定される (昭24) 神戸大学開学式、神戸大学兵庫師範学校男子部附属小学校と改称 (昭26) 神戸大学教育学部附属住吉小学校と改称 (昭33) 創立80周年記念式典挙行、プール竣工式 (昭41) 附属小学校にて「子どもと教育」創刊 (昭50) 帰国子女教育学級設置 (昭56) オーストラリア アイアンサイド校へ訪問団 (第1回) (平3) 全校ビデオ放送設備設

置（平4）神戸大学発達科学部附属住吉小学校と改称（平7）阪神・淡路大震災、避難所開設（平8）コンピューター学習始まる（平9）創立120周年記念式典挙行¹⁾

このことによって、附属住吉小学校は、明治11年の開校以降に、9回改称を重ねて今日に至ったこと、途中で姫路師範学校との統合、国民学校制度、国立への移管、教育学部から発達科学部への移管など多くの変動があったのである。

本論稿においては、第二次大戦後の昭和20年から24年に至る期間の教育を説明していくことにする。『創立20周年記念誌』（附属小学校刊）においては、「近畿モデルスクールに指定される」とあるのみであるが、私はこのモデルスクールの件と並んで、「全国社会科研究協議会にて発表（昭23）」や、「生活単元学習計画作成の実践」もとりあげたい。それは附属住吉小学校が、全国的にも特筆される業績をあげたからである。モデルスクールの件とともにこうした研究についても後に考察することにする。

第2章 わが国の第二次世界大戦直後の教育界の現状

附属住吉小学校の戦後の教育も、例外なくGHQ（連合国総司令部）の指揮下にあるCIE（民間情報教育局）の指導監督下にあったことを忘れてはならない。

終戦直後のわが国の教育界の動きは、次の通りであった。

（昭20）無条件降伏 マッカーサー元帥が日本管理方針を発表 GHQが軍国主義教育者の解雇などを指令する 教員組合運動がさかんになる GHQが修身、国史、地理の授業停止と代替計画の準備を指令した

（昭21）第一次アメリカ教育使節団が来日し、日本の教育改革についての報告書を発表 文部省が「新教育指針」を配布 GHQが地理学習の再開を許可 教育刷新委員会が公布された 文部省の教育研究全国協議会が開かれた 全日本教職員組合協議会が結成された 教育基本法が制定された 6・3制教育委員会が発足 日本国憲法が公布された

（昭22）教育基本法、学校教育法が公布され、4月から新学制が実施された

教育職員50万人中、49万人の適格審査が終了した 全教協30万人、教全連12万人、大学・高専教組2万人、その他の合同により日教組が結成された 社会科の授業が開始された

(昭23) コア・カリキュラム連盟、日本作文の会が生まれた 衆議院および参議院が教育勅語の失効排除を決議した PTA 第1回全国協議会開催 社会科教育連盟が全国協議会を開催 文部省が「学校図書館の手引」を発行 極東国際軍事裁判の判決が言い渡された 世界人権宣言採択

(昭24) 教育公務員特例法が公布された 全学連傘下の105校が大学設置法案等に反対し、ストに突入 吉田首相が、教育勅語に代わる「教育宣言」の作成について、私的諮問機関である文教審議会に諮った 国立大学長会議が、教員のレッド・パージについて研究委員会を設置した 文部省諮問機関が「学校図書館協議会」「学校図書館基準」を文相に答申した 大学教授連合が、学問の自由と教授の地位についての決議文を公表した

このように CIE の指導の下で、軍国主義教育は排除され、国民主権の新憲法の理念に沿って、民主的教育へと転換が行われた。その中で教育基本法が編み出され、自立した個人の育成をめざした教育の指針が確立した。新カリキュラムの開発や教育研究会の発足とともに PTA も活動を開始したのであった。しかしそうした民主化の気運も長くは続かず、レッド・パージを始めとする社会の変動が教育界にも影響を及ぼすことになるのである。

第3章 敗戦からの立ち上がり

1 敗戦の焦土の中から

敗戦当時の学校の様子を、当時の教官の水谷悦夫は次のように記している。

戦争は終わった。荒れ果てた学校、ぬりつぶされた教科書、生氣のない子どもたち、一時私たちは敗戦の焦土の中に茫然と立った。

しかし、その内にどうしても生きなければならない、何とか希望の光を求めて、楽しい世界に立ちたいと願う心の湧き出たのは、これ人間の本性であろうか。何とか立ちなおりたい、焼けただれ、どろんこの姿ではあったが、

何か心の奥底にはもう一度という気持ちは強かった。

もっと子どもを大事にしよう。今まで戦争に焦点をおかれてしまって、日本の国の子どもの事など考える余地はなかったのである。焼け跡の中に住む子ども、食べ物不足して痩せている子ども、顔色のさえない子ども、父や兄の消息のわからない子ども、はき物や服に困っている子ども、こうした子どもたちを、今後どんな教育でどう育てていくべきか、まだわれわれにはじっくり落ちていて考える余裕はなかった。ただ思うことは、現実のこの子どもを、もっと大事してやること以外に何物もなかった。(以下傍点筆者)²⁾

教職員は、子どもたちと、ここから立ち上がる。昭和21年10月に主事(校長)正月定夫は、「児童の生命の理解と尊厳性への信仰」を説く。休憩時、放課後など主事自ら子どもたちの遊びの中に加わり、縄飛び、鬼ごっこに夢中になって楽しむ姿があり、教職員も引き入れられ、子どもたちと接近する。職員会議を重ね、その中で、

「子どもたちの生命を育てる」ことは、学習面においては、「自発自展の態度を養っていく」ことにあるとした。そして、

(1)総合学習(低学年) (2)ダルトン案を加味した自学指導 (3)分団学習法 (4)プロジェクト法 (5)自学及び協同学習(高学年)をとっていく。ダルトン案については、「児童を自主的、積極的学習に向かわしめる一つの方法」とした。

さらに、国民学校教育からの移行の歩みを厳しく反省していく。

「請け負い仕事としての学習をさせた。それで果たして責任感を培うことができるであろうか、他の競争によって仕事を成しとげるという気持ちが、子どもには多分にあるのではなかろうか。またそれは多分に教科中心的ではなかったろうか。今から反省してみると、それはやはり従来行われた教科学習に腰をすえて、これをいかにして自発的に、また積極的に学ばせるか、学ばせ方の方法の研究であった。いかにして理解させ、知識を身につけさせようか、としたのである。子どもが身につけるその中身、その実践に移る前に、自発学習の『自発』という概念が徹底的に追究されるべきであった。このことをぬきにし

たまま実践研究に移った所に問題があったと思われる。」と反省する。³⁾

これは附属住吉小学校における終戦から1年半、昭和22年春に至る、謙虚で体当たりの実践研究の事情を語るものである。

2 研究発表会の実施

同校は研究校として、実践研究の成果を直ちに発表していく。終戦の翌年度から発表会を始めた。昭和21年度～24年度の内容は次のようであった。

昭和21年度 発表会 10月25, 26日 テーマ「新教育の実践」

研究発表 ①低学年の自発学習（松岡） ②音楽の諸問題（黒田） ③地理教育の学習過程（斎藤） ④科学教育と科学性（花田） ⑤ダルトン案を加味した自学指導（西村） ⑥あるべき国語学習 ⑦プロジェクト法と算数授業（津村） ⑧公民教育実践の方途（大玉）

講演 新教育の実践 正月定夫

新教育の在り方 長田 新

研究冊子 新教育の実践（B 6 版 252頁）

昭和22年度 発表会 8月, 10月 参加者 各々1,000名

テーマ 「わが校の社会科教育の実践」（8月）

「わが校の健康教育の実践」（10月）

研究発表 健康教育上の諸問題や、わが校の指導計画・実践について（汐田・黒田・樽谷・西村・岡田・足立・豊田の各教官）

講演 児童の衛生訓練について 市倉女史

健康教育の在り方 竹村 一

研究冊子 社会科教育実践案（A 5 版 40頁）

健康教育実践案（A 5 版 48頁）

昭和23年度 発表会 10月6, 7日

テーマ 生活単元学習

前年度の社会科教育研究工作方案の実践から、新教育の精神が単に社会科に止まらず、全教育計画について考察を加えるべきであるとの結論に達し、生活単元学習を立案実施。

研究発表 ①生活単元学習の意義（三輪）

②新教育の講想と構成手順（斎藤）

③社会調査と新教育計画（園田）

④児童調査と新教育計画（水谷）

⑤構成の実際（大玉）

⑥基礎学習の位置

⑦低学年の生活単元学習

⑧高学年の生活単元学習

講演 社会科教育の発展 重松鷹泰

共同研究学校 新教育の研究実践上の協力校（神戸＝湊川，朝来＝中川，氷上＝久下）が共同研究学校の名称で共同研究に入る。

昭和24年度 発表会 7月6，7日 参加者1,500名

テーマ 生活単元学習の修正

前年度計画案の実践研究結果を反省、分析し、①基礎系列の組織化 ②より活動的なプログラム化 ③倫理方面の充実化を企画して修正を加えた。

研究発表 ①単元学習を顧みて（大玉）

②単元学習の発展（黒田）

③単元学習と新しい理科教育（西村）

④国語教育と生活単元学習（岡田）

⑤算数教育と単元学習（足立）

⑥生活単元学習と個別指導

⑦わが校の訓育の歩み（阪下）⁴⁾

第4章 社会科の創設から「生活単元学習」へ

1 草分け時代の社会科単元作成

文部省は、昭和20年5月に学習指導要領社会科編(1)（試案）を公布した。附属住吉小学校では、新設の社会科をどう実践するかで苦心を重ね、次のように記している。

従来の国史、地理のように教科書に沿っていくものではなく、それぞれの学校で単元を作っていかなねばならぬということ、また指導要領の内容それ自身が、外国（米国）の事柄を直訳したような感じを受け、何かわれわれの感覚にピッタリしないものがあること、また社会科に対する経験者や指導者がなかったこと等、われわれはどのように指導計画を立てるかに迷った。しかし何とか学習計画を立てようと相談し、まず実態調査に取りかかった。遊戯・学習・文化・宗教・健康等の面の実態調査をした。しかし折角の調査であったが、次の単元計画にどう生かしたかは疑わしいものであった。⁵⁾

単元としては、4年生の例では、「4年生のくらし方」「住吉役場」「弓弦羽神社」「所持品しらべと上手な使い方」などが協力して作られる。「無我無中で作った草分け時代の社会科単元である。後から思えば幼稚な単元であるが、指導者なしに、みんなの知恵を寄せ集めてここまで作り上げたことは、自主的、創造的態度を重んずる新教育にあたるわれわれ教師自身にとって、貴重な教育上の“実習”であったといえよう。」と水谷は述べ、更にこの単元について5つの反省を行っているが、これらは極めて貴重な内容を含んでいる。

- イ 社会的なものと、日常生活的なものを混入した社会科の実践案だ。
- ロ 単元内容は、その単元題目に関係のある社会事象の寄せ集めの的だ。
- ハ 社会知識を収得させ、順応型、しつけ型の態度が強い。
- ニ 寄せ集めの傾向が強いため、その単元を通して何を育てていくかのねらいに欠ける。
- ホ 子どもの考えや気持ちといったものが考慮されていない。⁶⁾

これらの反省は、2001年度から実施される総合的な学習の時間を、どのような内容でどのように実施し、いかに主体的に子どもを参加させるかといっ

た課題に対して、大きな示唆を与えてくれると思われる。

2 人間探求、教科学習の検討から、真の総合学習－生活単元学習－へ

終戦から2年を経るとやや落ち着く。そして昭和23年に、自校の教育方針を打ち立て始めることになる。その理念として次のように記している。

新しい時代は常に新しい人間を要求し、その新しい人間形成のためにはまた新しい教育が必要になって来る。ところで今私たちが要求するものは、今この現実の中であって、自分たちの生活を自主的に、実践的に、正しく切り開いていく生活する子どもであり、単に知識をまる覚えするよりも、新しい時代を創造していく行動人である。

当時の三輪主事は、新しい時代の要求する人間像を次のように要約して述べている。

(イ) ものごとを総合的に考え、生活の課題を正しく処理できる実践的、活動的人間

(ロ) 社会の改善に貢献し、更に文化を創造していく有為有能な人間

この問題を解決していくには、「現場の私たちが、協同討議による理論と実践によって生み出すより他はない。」と考えて実行していくのである。その、自らの手で新しい教育の道筋を作ってゆくという熱き想いを、次の文章に見ることができる。

それはたしか、23年2月ごろだったと思う。火の気の少ない火鉢のまわりに寄ればカリキュラム論に熱中し、冬の日早く暮れていくのも忘れて話し合うことがたびたびであった。思うに従来の研究は各教科に根をすえて、自発的な学ばせ方の一つの研究に過ぎなかったのである。いかにして知識を身につけさせるかが問題であった。ところで今私たちが問題にしようとするものは、知識を利用して生活を切り開き、自ら生活を正しく処理していく実践人であった。

こう考えてくると、今まで行ってきた従来の教科学習－生活から遊離し抽象された傾向の強い教科学習－では果たして可能であろうか。

この問題で何回も討議を重ね、結果として、「教科学習は、真の自主的学習をもたらさない」とし、実践的生活人を育てていくためには、「生活そのものを学ばせねばならない」とした。そこには子どもの意欲があり、真に自主的学習が行われると考えたのである。しかしこの切り換えには、絶対的信仰者、穏健派、静かに続く者とがあり、容易ではなかった。この検討から生活教育に対して確信を深めさせたのが、「20数年来行なってきた低学年の総合教育の貴重な体験」であったと言う。

従来行われてきた総合教育類型を挙げてみると

- (イ) 各教科を一つの生活題目のもとに寄せ集めて作った一合科教授
- (ロ) 全く教科の立場を離れて、生活そのものをめざしていく一総合教育
- (ハ) 一定の題材を中心にし、学級の児童が同時に作業と遊戯の形式で共同的に学習していく一全体学習

この従来の型について活発な討議が繰り返され、昭和23年、4、5月頃に、教官各自の主張する生活単元学習案が出し合えるようになっている。ここでの案は大体3つにまとまる。

- (イ) 生活総合学習単一案
- (ロ) 生活総合学習を中心としながら、基礎的技術面も加味する案
- (ハ) 教科ごとの生活総合学習案

である。(ハ)の場合では、算数で単元「いもほり」を例として論議もした。「数量や重さの取扱いだけをしても生活を陶冶することにはなりにくい。掘り方も、土質や、世話の仕方や芋の食生活に占める位置の学習もしたい。しかし各教科でそのように並行してやれば、児童自身の生活の中心が支離滅裂になる。一生活を学ばせねばならない。子どもの生活には中心が必要だ。それに基礎的な面も修練させたい。」と考え、真の総合学習として最も妥当な学習計画を求めていく。そして議論の末に何とか作り上げたのが「生活単元学習」と呼ぶものであった。この学習は「生活中心の総合学習」といってもよいものであったが、「従前の総合学習の中には、合科学習・総合学習なども含まれていたので、誤解されることをおもんばかりで、このように呼ぶことにした」⁷⁾

この学習の根本的立場は、

- ① 生活すること自体、経験そのものに目的と価値を認める。
- ② 社会科と理科を中核としたコア的色彩の強いものである。
- ③ 生活単元学習は、社会科教育の趣旨をより効果的に生かすものである。

これらの根本的立場は、他の実験校とも共通する部分を持っている。例えば、奈良女子大学文学部附属小学校において作成された「奈良プラン」にもそうした考え方が見られる。

ここで、「奈良プラン」の概要にふれてみたい。「奈良プラン」は教科カリキュラムではない。生活カリキュラムである。民主主義による新しい国づくりをして、人間らしく生きていく「人間として強い人間」の育成を目標とし、「しごと・けいこ・なかよし」という、3つの生活に基いたカリキュラムなのである。

このプランを「コア・カリキュラム」と理解した教育学者もあったが、しかしプランの作成者は、「3つの生活にはコアはない。3つのバランスが大切なのだ」としてこの見解を否定した。3つの生活それぞれが同等の重要性を持ちながら独立して、全体として子どもの存在を支えるのである。それぞれの生活が、生きがいを求めて全体の力を発揮する、いわば「生きがいカリキュラム」ともいえるものであった。

3つの生活のうち、「しごと」は戦前からの「奈良の合科学習」を真直ぐに受けつぐもので、単元による問題解決学習である。「しごと」は、子どもたちが、その生活の中で問題をとらえ、その解決を試みていくことであり、従ってはっきりした目あてを持って、子どもたちが周囲の世界にはたらきかけることであり、社会及び自然の事象を科学的に理解し、その合理的な処理のしかたを会得することを含むのが当然である。それ故に、社会がそこで暮らす人々に要求しているものの中で、社会科及び理科の要求となってあらわれているものは、恐らくすべてこの「しごとをする」ということを通じて充たされるであろう、という考え方に立ったものであった。

その本質としては、「しごと」は「人間としての基本的な欲求」を正しく充足する能力を発展させ、「人類の努力に対する信頼の念」を深化させるという

大目標を持つものであり、そのためには、「子どもたちの持っている基本的な欲求を充足させるための生活」を与え、「その生活の持続発展に対する人類の努力にめざめさせる」ことを根本としている。それはまた、「自己の真実の欲求」であり、しかも「他の凡ての人に共通である欲求を充足しようとする生活を与えること」であり、それを「最も真剣な共同生活をさせるというねらいを中核として、展開させて行く学習」なのである。

「しごと」では、全身全霊を打ち込んだ真剣な共同生活、本然の問いを求め、遊びや作業体験を通して追究生活を息長く続けることを望む。志を掘り起こし、これを太らせて実現させていく。大人が仕事に命をかけることに通じるものであるとされている。

「けいこ」は、各種能力指導系統表のうち、「しごと」と「なかよし」においては自然に、必然的に磨かれない能力、絶えず系統的に磨く必要のある能力を端的に磨くものである。

「なかよし」は、児童が学級や学校を自分たちでよりよい生活の場にし、文化を高める生活であり、「しごと」の実践に深く関わりを持ち、自己と社会の関係を問うものである。⁸⁾ こうした面から、「奈良プラン」は自ら学び、生きようとする子どもの立場において、その活動に三方向性を持たせ、そのバランスの上に立つ「生きがいカリキュラム」であることが理解される。

このような「奈良プラン」同様、附属住吉小学校が編み出した「生活単元学習」は、日々の暮らしの中で、あらゆる事象に触れ、そこで自ら感じ、考え、発見し、表現する子どもの姿を中心に据えて、生活すること、経験すること自体を目的とし、そこにおいて子どもたちが各教科から学びとったものが、自発的に生かされ、各人の活動として実践化されていくものである。

子どもの生活に主体を置き、教科的内容や知識の学びとりが、子どもの内側で発酵し、熟成し、自発的な応用力となって、生活的事象の中で生かされる。こうした姿勢は、戦後教育の再生において先駆的で、重要な意味を持つものであると言えよう。さらに、教科としての社会科の位置づけに大きな影響を与えるものであろう。こうした理念目標の確立を受けて、「生活単元学習」は実践

授業、研究へと進み、その成果をあげることになる。それについては次号に述べることにする。

注釈

- 1) 『創立120周年記念誌』平成9年 神戸大学発達科学部附属住吉小学校
『平成10年度学校要覧』平成10年 神戸大学発達科学部附属住吉小学校
- 2) 『新教育10年－回顧と展望』近畿新教育実験学校発足10周年記念出版 第1部
各校の実践報告, 第2部 反省と展望, 第3部 記録と回顧 下程勇吉編 黎明書房 昭和32年 175頁
- 3) 同 176～178頁
- 4) 同 311, 312頁
- 5) 同 177, 178頁
- 6) 同 178頁
- 7) 同 179～183頁
- 8) 「生活の中核としての“しごと”」『学習研究』昭和23年12月号 奈良女子高等師範学校学習研究会

参考文献

- 『社会科教育資料Ⅰ』上田薫編集代表 東京法令出版 昭和49年
『教育方法論Ⅰ 教育実践』重松鷹泰著 明治図書 昭和50年
『たしかな教育の方法』奈良女子高等師範学校附属小学校学習研究会編 秀英出版
昭和24年
『生活カリキュラム構成の方法』文部省教科書局実験学校連盟編 六三書院
昭和24年
『全国社会科研究協議会発表要項及資料』社会科教育研究社 昭和23年
『カリキュラム』コア・カリキュラム連盟編集 誠文堂新光社 昭和24年